

シュタイングラーバー [STEINGRÄBER&SOHNE]

●実力ナンバーワンの幻の逸品

シュタイングラーバーというブランドは、日本ではめったに耳にすることがないし、実物を見る機会もまずないだろう。しかし、シュタイングラーバーはピアノの本場ドイツでもっとも著名なピアノのひとつで、国際的なピアノのコンクールでも何度も実力を誇っている。ドイツのバイロイトはワーグナーの音楽祭で国際的に有名だが、シュタイングラーバーはこのバイロイトで生産されていて、しかもシュタイングラーバーがこの音楽祭のスポンサーになっている。品質が高いわりにその知名度が低いにはわけがある。それは、シュタイングラーバーがまったたくの手造りピアノメーカーであって、生産量が月産五十台程度ときわめて少なく、あまり海外に流通していないこと、また、宣伝にはほとんど費用をかけないことなどが理由としてあげられる。まさに、「銘酒に看板いらず」を地でいっているようだ。

シュタイングラーバーの歴史は古く、早くも1820年にエドワード・シュタイングラーバーがチューリンゲン州のアウンシャウクでピアノを造りはじめている。そして、52年に、バイエルン州バイロイトに移転して、これが今日のシュタイングラーバー社を守っている。ここには、1754年に建築された、一見古城のようなロココ建築の建物が残っているが、これが今日のシュタイングラーバーの本拠地ともなっている。たとえば、シュタイングラーバー家のファミリールーム、また小さなコンサートホール、そしてバイロイト地域の文化センターとしての役割をも担っている。シュタイングラーバーは、その古い歴史にもかかわらず、その伝統についてあまり多くを語らないが、これも多弁にならず品質に語らせるといって、頑固一徹な技術者で構成される同社のポリシーを表しているように思われる。二つの大戦や大恐慌をへて、今日まで生き残り、高品質のピアノを造りつづけるうちには多くの苦労があったものと推察されるが、なんにせよみことなことだと思ふ。

さて、今日のシュタイングラーバーが生産するピアノは価格表の通りだが、このほかにも、美しい彫刻や装飾を施したパロックモデル、ピアノの前蓋の表裏を入れ替えて黒塗りとマホガニー調のデザインの変化を楽しめるリバーシブル仕様にしたもの、前衛的な美しいデザインのポストモダンなど、変化に富んだ仕様が準備されている。また、微

底した手造りピアノなので、注文に応じて好みの塗装に仕上げてもらうことができ、そのための色見本も用意されている。このほかにも、環境に配慮して天然素材の塗料や接着剤、そして象牙の乱獲に配慮して牛骨を鍵盤に使ったエコロジカルピアノ、また、アレルギー患者のためにかかりつけの医師が許可した部材だけで構成されたアレルギー対策ピアノ、また車イス使用者のために口や頭の操作で電磁石を 작동させてペダルが操作できるように改造された障害者のためのピアノなど。

とてもヒューマンライクでユニークなピアノを生産している。このように、その古い伝統にもかかわらず、さまざまな新しい試みにチャレンジしている精神は本当に見上げたものである。とくに感心したのは、アップライトピアノに、グランドピアノと同じダブルレペティションシステムを搭載したことである。ピアノ界の常識では、アップライトのアクションにダブルレペティションは搭載できないというもので、筆者もそのように思い込んでいたのだが、こんなものがあつたのかと本当に驚許をとったシステムを実際に見て弾いたときには、シュタイングラーバーがかと本当に驚嘆した。たしかに、他社が開発したアップライトのアクションのなかにも、パネや磁石を使って連打性を改善した興味深いシステムはいくつかあるのだが、シュタイングラーバーのものと比較すると、それらとは本質的に異なつた仕組みになっている。少し専門的になるが、バックチェックに部品を追加して、鍵盤がいちばん上まで戻らなくても、つまりジャックがハンマーバットに戻らなくても、追加の部品がハンマーシャックルを押して連打が可能になるという仕組みで、これはグランドピアノのアクション構造と実質的に同じはたらきをするものだった。



シュタイングラーバー・205 クラシック

そして実際にこれを弾いてみたところ、その差は歴然で、ほかのアップライトはもちろん、普通のグランドピアノよりもはるかに弾きやすいのにとっても驚かされた。鍵盤はとて軽く制御しやすく、そしてトリルがグランドピアノと同様にとても弾きやすいものだったが、これがフランスの権威あるピアノコンクールで優勝したのもなるほどと納得した。筆者がこれまでに弾いたアップライトピアノのなかで、いちばん弾きやすいと感じた。いちばん背の低い、高さ百十センチの小型のアップライトもとても音量豊かで、大型のピアノにまったく引けをとらないにも驚かされた。とくに、小型のピアノの場合は最高音部はあまり音にならないことがあるのだが、シュタイングレーバーは驚くほど豊かな美しい音が出るのには本当に不思議に思った。その秘密を知りたいと思つて、なかをじっくり観察したのだが、見かけはとくになんか変わったものを見当たらず、長年の伝統や技、材料の徹底した吟味、高い技術の積み重ねがこのような成果となつて表れているのだろう。

アップライトの138クラシックについては、これはたぶん、アップライトでは世界でもいちばん大型のピアノの部類に入るものと思うが、これは普通のグランドピアノ以上の品質と高く評価されているようだ。筆者が販売店を訪れたとき、いいピアノを求めて各地を遍歴していたあるピアノ愛好家がせひにといつてこのピアノを無理やり買取つてしまった直後ということで、見る事ができなかったが、販売店の責任者は「あれだけは売れなくなつた」とさかんに悔しがっていたのがとてもおもしろかつた。ピアノが売れて悔しがるというのも変な話だが、責任者がどのくらいこのピアノに惚れ込んでいたか、またピアノにその魅力があつたということを物語っているように思う。宣伝に力を入れなくても、実際に弾いてくればわかるという強い自信があつて、またこのような商法で現在まで生き残つてこれたのも、背後にこのような実力があつたことなのだろう。

シュタイングレーバーのグランドピアノについても同様で、これらも数々のコンクールで優勝してきたが、ちなみに2001年パリで開催された国際的なコンクールでのサロングランドピアノの最上級クラス部門ではシュタイングレーバーの168が二度目の優勝を果たしている。参考までに、このクラスでは、スタンウェイの155が優勝を分け合つて、ベヒシュタインのX158、ベーゼンドルファーの170、ファツィオリの156が四つ星とこれに続いている。ちなみに、中級クラスではシンメルのGP169が優勝、ヤマハのC1が四つ星、ボストンGP163が三つ星となり、入門機クラスではカワイのCP30が優勝している。この百六十八センチのピアノはグランドピアノとしては小型だが、その音色の美しさや音量の豊かさゆえに、かなり大きなコンサー

トでも実際に使用されることが多いとのことだ。実際に弾いた印象では百六十八センチのものも、二百五センチのものも、とてもタッチが軽く、また、ピアノツシモからフォルテツシモまでとても制御しやすく、大変に弾きやすいものだった。

もつとも、リストが弾いたシュタイングレーバーがいまも完全な形で残っていて、しかも現役でコンサートに使用されているのだが、その録音の音色は、さすがに時代の古さや重さを感じさせるものだったので、シュタイングレーバーは人間と同様、自然に歳を重ねていくのだろう。

筆者はピアノ愛好家にいろいろピアノを紹介したいと願ってきたが、とくにこのシュタイングレーバーはぜひ実際に弾いてほしいピアノの一つである。こんなすばらしいピアノがあつたのかと、多くのピアノ愛好家に驚きと賛辞をもつて受け止められるのはまちがいない。

著者 足立 博「まるごとピアノの本」 発行所(青弓社)より抜粋